

慶應義塾保険学会 23年度第2回研究会開催

愛知学院大学 田畑康人名誉教授が講演



田畑氏

慶應義塾保険学会は2023年11月16日、23年度第2回研究会を開催した。講師は愛知学院大学の田畑康人名誉教授が務め、慶應義塾大学で保険学と出会ってからの半世紀にわたる自身の経験を、仲間や教授陣とのやりとりを主軸に、ときにユーモアを交えつつ振り返り、最後には、学生たちに向けてメッセージを贈った。

田畑氏と保険学の出会いは慶應義塾大学商学部3年生のとき。同大学では、1・2年生で教養課程を学び、3年生から専門課程を選択する流れだが、入学から2年間、簿記や流通・マーケティング科目等の商学部関係の科目に興味を持てずにいた同氏は、多くの時間をクラブ活動に費やしていたため、通常の商学部系

説明会に登壇した庭田

の科目では授業に追いつくことができず、絶望感を感じていたという。悩んだ末、全く新しい分野であれば自分にも可能性があるかもしれないと考え、3年生の初めに行われたゼミ説明会で今まで何もやったことのない分野を探した結果、「保険」に関するゼミに白羽の矢を立てた。

か、象に勝て

ますか。人間

にとって最も

重要なのは首から上だ」と言われ反論できず悔しい思いをしたことも印象深い思い出と振り返った。

入口から庭田教授の手厳しい洗礼を受けたものの、合格を果たしたことで、同氏の保険学の道は始まった。学部専門課程

半世紀にわたる「保険学との歩み」語る

では、庭田教授をはじめ、葛城昭三教授（早稲田大学教授）、鈴木辰紀教授（早稲田大学教授）、笠原長寿教授（明治大学教授）、須田昶非（常勤講師（安田火災勤務））、藤沢益夫教授（慶大）ら少なくとも9科目を7人の第一線の教授陣から学ぶこととなった。当時の大学教授は膨大な勉強量に裏付けられた自信と威厳に溢れ、学生たちの間でも「三歩下がつて師の影を踏まず」という言葉が疑いなく受け

の輪読に取り組むことに。庭田教授の著書「保険理論の展開」を学ぶ、いわゆる「本ゼミ」の他に、「サブゼミ」として、4年生の指導の下、課題図書（毎週200字詰め原稿用紙20枚にわたるレポートの提出が課されていたため、過酷な日々が続いた。4年生の時、卒業論文の第1回報告には「資本主義社会と保険」をテーマに挑んだものの、大学

与が業界一位と名高い損保業界、その中でもトップを走る東京海上だと目標を定め、見事合格。ところがそこで庭田教授から「東京海上は他大学の派閥が強い。君が行っても将来はない。それより、三井系の大正海上を紹介するよ」というアドバイスがあり、「三井系であれば慶應義塾大学の影響力は大きいはず」と大正海上の面接を受けることに。この時、庭田教授は「もし大正海上に落ちたら就職は諦め、大学

ず、同氏は、
修士課程受験
でもまさかの

院進学を目指すこと」という条件を提示していた。この時の衝撃は今でも夢に見るほどのものだったという。「庭田教授は英

たこともあり（ただし、同社の内定は断っていた。それが当時の不文律だったという）、自信満々で大正海上の面接を受けた同氏だが、結果は不

homai web

メールマガジン

保険毎日新聞の紙面に掲載している
ニュースヘッドラインを毎日お届け
します。登録無料です！
その日の注目のトピックが
わかります。
保険毎日新聞の購読者でなくても
ご登録いただけます。

詳細は
こちら

強不足の結果であることはいままでもない」と述べた。
2回目のチャレンジで無事合格を果たした修士課程では、英文の文献をベースに授業が進むため、毎日が予習との戦いだったというが、この時の経験が「英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ」ではなく、「保険を学ぶのではなく、保険で学ぶ」という現在の座右の銘につながっていると語り、「それでも第二外国語の独語の文献が無くてよかった」と語り笑いを誘った。
修士課程2年開始直後には交通事故で全治6カ月の重症を負うなど予期せぬトラブルがあつたものの、数々の困難を乗り越えて研さんを重ね、修士論文では「福祉産業としての保険とその周辺」を論題に選定。社会保障制度を基盤とした上で私的保険がいかに福祉の向上に貢献できるかを考える内容で、口頭試問では教授陣から厳しい指摘を受けたながらも、博士課程で研究しなおすことを条件に合格。その後、博士課程に進み、猛勉強の結果、博士課程後期の試験では一発合格を果たしたことなどを紹介した。
1980年に専任講師として愛知学院大学に赴任後は保険総論や損害保険論、ゼミ、生命保険論を担当。その後、英国留学などを経て、2023年3月に42年間の大学勤務を終えた同氏は、学生たちへのメッセージとして、生成AIの活用に触れ、「私たちの時代は海外の優れた参考文献や新たな論文を見つけるために多くの時間を要していた。生成AIを参考文献や資料の収集に利用することは大いに結構だが、そこには、『丸写し』や『盗用』のリスクが常に付きまとうことを意識する必要があるだろう。卒論等の執筆に当たっては、どこが自分の考えなのかをこれまで以上に明確化することが重要だ」と呼び掛けた。
この日は、田畑氏と同じ時代に学生生活を送っていた参加者が多く出席していたこともあり、講演後には会場から温かい拍手が贈られた。